
とある最後の皇帝と自分だけの現実

鼻糞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある最後の皇帝と自分だけの現実

【Nコード】

N9207N

【作者名】

鼻糞

【あらすじ】

二つの世界があつた。片方は科学と魔術が融合した世界。もう一方は科学と魔術が反発しあい、競うようにそれぞれが発達した世界。融合した世界の天才、反発した世界の天災、そうした世界の狭間の存在。三つが交わり物語は進む。

原作をぶっこわしな上に初めての二次創作、妄想全開、さらに吐き

気がするほど痛々しい稚拙な文章ですが、宜しくです。

誰かの記憶

あるところに、カミサマが現れました

そこに空間ができました

右手を横に振りました

小さな地面ができました

二つの種を植えました

手を掲げ光をつくりました

手を叩いて水をつくりました

小さな芽ができました

それぞれ七日間かけて、芽の中の世界を整えました

14日目

カミサマは困りました

カミサマはもう行かなくてはいけません

カミサマは閃きました

カミサマは二つの木のために世話をする管理人をつくりました

カミサマは、管理人のために木を枯らしたときのペナルティーをつくりました

カミサマは行きました

カミサマはもう戻ってきません

ここに残ったのは

空間と二つの木、管理人と…ペナルティーでした

狭間（前書き）

完全自己満足です。

どうか誹謗中傷はしないで下さい笑”

狭間

『それで、なんで俺はここにいるんだ？』

将吾は白に近い無彩色の塊、だけでも異様にクッキリとしたシルエツトに尋ねる。

「む？普通だったら私が誰か、ここがどこか尋ねるところなのだな。

ふむ、君はこの状況でも動揺しない人間なのか」

『動揺してるに決まってるんだろ、感情を表に出さないようにしてるだけだ。

それより質問に答えろよ』

「む、そうだった。

君はここに飛ばされたのだ。

世界に弾かれたと言ってもいい。

理由は簡単だ。

君が君と同じ魂を持つ人間と出会ってしまったからだ。

一つの世界に同じ魂が存在することは許されないからな。

世界が異常を感知して君を弾いたという訳だ…」

「…む、自己紹介がまだだったな。私の名は

『真理だろ。そこでここは世界の”狭間”、お前だけの空間』

…よく知りえたな。誰も知りえることなぞ無いはずなのだが。

だが正確には真理という名ではない。
私は剪定者。世界の調節者とも言つのか？
まあ真理と呼んでくれても構わんがな。」

『剪定者…ね。良く言ったもんだ。
けど真理でいーってんならそうさせて貰つわ。

そんで話の続きなんだがよ…』

将吾の纏う空気が変わる

『お前の話通りなら、その俺と同じ魂の男もここにいるはずだよな？
何処にいる？』

薄く笑ったようにシルエットが動く。

「気になるのか？」

『吐け』

彼の右手が開かれ、正面に突き出される。
その延長線上には真理。
親指と人差指の間から”それ”を捕捉し、能力を発動しようとする。

……が、”その人物”にも彼にも変化は起きない。

何故？

「答えは簡単だ。ここは私の空間。

この”狭間”では全てが私の統治下に置かれる。

”お前の”、じゃなくてな。」

彼は思わず舌打ちをする。

そして正面にかざした右手に今度はバスケットボール程の火球を生み出す。

「ふむ、無駄な足掻きは感心しないな。

ここが”私だけの空間”であり、君の切り札が通用しなかった時点で私には勝てないと悟るべきではないか。」

ガッ

抑揚無く言い切ると同時に将吾は何かの圧力により組み伏せられる。火球は霧散し、指さえほとんど動かない

「まあ落ち着け。誰も教えないとは言っていないだろう。

結論から言うと、彼らはこちらにはいない。

弾かれたのは君だけだ」

将吾にかかっていた重さが無くなる。ゆっくり、体が動くことを確認した後で、

『何故だ？俺は同じ魂に出くわしたからここに飛ばされたんだろ？
ならあいつらだって俺に出くわしたんだからここに飛ばされるんじ
やねーのか？』

無彩色の物体は顎のようなものを指でなでながら答える。

「ふむ、良い質問だ。

確かにそうなるべきなのだがな、これには例外がある。

一度世界を渡った者は二度と渡れないのだ。

つまり、君が出会った”もう二人”の君はもう一つの世界から来た
人間ということだ。

だからこそ君だけが世界に弾かれたのだ。」

『…………。世界を渡るには何通りの方法がある？』

「二通りだけだ。世界に弾かれ、ここを通り渡るか、次元の歪みに
落ちたのを私がもう一方に渡すか。」

『！待て、それなら奴らは一度ここに来たって事か？』
無彩色の人間は人差し指を立て、言う。

「そう、ここで本題に入るのだ。」

。

狭間（後書き）

うん、説明臭い。ホント。

軽く主人公紹介

東 あづま
将吾 しょうご

年齢：16（18）

身長：170cm（180）

体重：56Kg（62）

能力：

発火能力 - Level?

冷凍能力 - Level?

自分だけの現実 - Level?
パーソナルリアリティ

？

生い立ち：

皇族の末端の家系に生まれる。

自らの両親を含め自分の理解者がおらず、殻に閉じこもり自分を偽っている。

本質は優しい、はず。

派閥争いを生き抜くため（あくまで皇帝になるためではない）、剣道や空手、合気道のある程度習得している。

また、幼い頃からの教育により、科学、魔術両方の世界を知っている。

ただし、それは彼のいた世界の話であり、科学と魔術がお互い独自の発達を遂げた世界では、双方の6割程度の知識しかない。

よって、学園都市の技術を殆ど知らないし、インデックス程の知識もない。

また、神のように崇められていたため、敬語は苦手

人でありながら真理に最も近づいた存在。

物語が進んだら更新します

彼の記憶（前書き）

相変わらず説明臭い…

まあ初めて書くんだからこんなもんでも許して下さい笑”

彼の記憶

科学と魔術が融合した世界。

そこはもう片方の世界とほとんど変わらない。

三つの点を除けば。

一つには

その世界は科学と魔術を併せ、共に何かを目指している点。

次に

この世界で目指す何かとは、神様や神様の答えではなく、世界の狭間に存在すると考えられる真理だという点。

最後に

この世界では、とある東洋の一国が世界の殆どを支配していたという点。

違わないようで実は根本から違うかもしれない世界。

そこが彼の存在した世界である。

そしてそこで、彼の記憶が創出された。

彼は日本の皇帝であった。正確には日本帝国の、だ。

彼は16歳で皇帝になり、それと同時に世界のほぼ全ての国と地域を手に入れた。

各国は彼を神のように崇めた。
齡16にして、世界の求める真理という存在に限りなく近づいたからである。

しかし彼は全く満足していなかった。

自分に追従しない少数の国家に、ではない。

自分が持てない僅かな権力に、でもない。

むしろ逆である。

彼の望みは世界の全てを自国の名前に上書きすることでも、世界の全ての権力を握ることでもなかった。

もつと言うなら、彼は皇帝という座にもつきたくなかった。

純粹に人として、人を信頼し、信頼される、平凡な幸せを望んでいた。

だが環境がそれを許さなかった。基本的に皇帝につけるのは正統な血筋の者だけである。

その例に漏れず、彼はそういった血筋に生まれた。

正統な血筋といっても、皇帝の座からは程遠い末端の家系である。

一般人からは雲の上の存在だが、一族からは何となく下に見られる、中途半端な位置だった。

故に彼は肩を並べ語り合えるような友達はいなかった。

一族の同年代には馬鹿にされ、一般の同年代からは敬語を使われ、彼に心を開く者も、彼が心を開ける者もいなかった。

彼は一応は皇位継承の候補である。

それゆえに一族同志での騙しあいや殺しあいがザラにあった。

一族の末端で周りからの期待は殆ど無く、普通の生活を求めている彼にも一族のいざこざの火の粉が降り懸かった。

騙され利用され、暗殺されかける。

日常がその繰り返し。

嘘と殺意が渦巻く環境の中、

周りに信用を置ける人がいない彼が生き延びるには力をつけるしかなかった。

自分が生き延びるだけの。

そうやって彼は既に習得した二つの能力の他、

更に二つの能力を得た。

その内の一つが真理に最も近い能力、

”自分だけの真理”である。

世界が目指している存在に最も近づいた彼は、一気に皇位へとの上がった。

そしてそれから間もなく世界が彼を知り、彼を認めた。

ただ、その時、世界は、家族は、

彼を人間として見ていなかった。

完全に神を見るような目、すなわち尊敬と畏怖の対象としてしか見られなかった。

将吾はここで、完全に独りとなった。

世界の支配などどうでもよかった。

皇位などどうでもよかった。

彼はただ、人との重要な繋がりが欲しかった。

何でも一緒に共有する仲間が欲しかった。

だが結果、将吾は孤立した。

周りに少しでも認められるため。少しでも信用されるため。そのために身につけた能力が孤立に拍車をかけた。

そして失意の中、彼は皇帝として2年間働き……

あの日が訪れた。

。

大事な話（前書き）

大事な話です。

先に言っておきますが、

あえて会話文のみなんですよ。

決して面倒くさいとかそんなんじゃないんですよ!!!(

;))

大事な話

。

『つまり、もう一方の世界で勝手に世界を渡らせた奴らがいるってことか』

「そう、渡るには狭間である私を通さねばならないはずなのだが、それを無視して強引に時空を繋げ彼らを送り込んだ者がいるのだ。」

『今までこんな事はあったのか？』

「ある訳がない。そもそも今まで世界を渡った者はいないのだから、異常以外の何物でもないのだ」

『そんで、初めてここに来た俺を使ってそいつらを妨害させようってか』

「そうだ。このままでは異常に耐えられず両方の世界が枯れてしまう。そうなってしまうえば私はペナルティーを受ける事になり、永久に罰の炎を受けつづける事になるのだ」

『保身かよ。まあいい、やってらんよ。お前の事なんざどーでもいい、世界の事も好きじゃねーけど、俺がなんもしなかったせいで関係無い人達が滅びるってのは寝覚めがわりいからな』

『だがよ、今から俺がもう一方に飛んでも、もう事がおきちゃった後なんだから意味ねーんじゃないの？』

「その点はぬかり無い。今から二年前にお前を送るからな。その際お前は二年間の記憶と成長分を失うだろうが、記憶の方は問題なからう。お前の能力を使えばな。」

『なるほど。アレに記憶をセーブするときゃあ能力使った時に全部思い出すっつーことか』

「うむ、君の切り札には私でも、例え神でも介入できぬからな。時を遡った程度ではなんの問題もないだろう」

『ふーん。あ、時を遡って頑張ったけど、それすらも運命のスケジュールに組み込まれて結局結果は同じってオチはねーの？運命決定論っつーのか？そんな感じの』

「大丈夫だ。何事にも例外はある。私の知らないところで世界を渡る者がいたように、人間でありながら私に似た能力を身につけるお前がいる。」

お前は普通では起こり得ない異常だ。両世界きつての天才と言っても良い。お前なら、運命の干渉にも耐えうる。

厳密にはお前ともう一人、両世界の天災なら、だがな。」

『お褒め預かり光栄ですってか？そんな買い被りはいいとして、天災って何よ？』

「お前と同じく世界の異常として誕生した人間だ。」

男の名は上条当麻。神の幻想すら打ち消す能力を保有している。
向こうへ飛んだらその男を探し、その男と共に運命を変えるのだ。
神すら干渉できない力。
神の幻想を打ち消す力。

異常の二人が合わされば、運命など容易く変えられる。」

『…まあ大体誰とどーすりゃあ良いかつてのは分かったんだがよ、
もう少しだけおさらいと、質問していいか？

どーでもいい事だが俺にとっちゃあ大事な話だ。』

「何だ？」

『まず、俺がここにいるのは世界に弾かれたから。間違いない
な？』

「そっだ」

『そんでこの原因は向こうの世界の人間で、お前を通さず強引に世
界を渡った、と。』

「うむ」

『送り込まれたのは俺と同じ魂を持つ人間で、同じ魂だったからこ
そ、俺は弾かれた。』

「世界を渡れるのは一回きりだからな。」

『さらにこのままでは歪みによって世界が枯れる。よって初めてこ
こに来た俺を向こうに込んで世界の崩壊を阻止する。そいつはお前

の保身のためだ、と』

「申し訳ないと思うが、利害は一致しているはずだ。」

「

『崩壊を阻止したい俺と、

罰を受けたくないお前ですか？』

「そつだ。違うか？」

『いや、その通りだ。俺は終わらせたくない。』

『

『おさらいはここで終わりだ。』

さて、質問なんだが、

質問は3つだ。』

『一つ、お前の能力は狭間での絶対性で間違いないか？』

「うむ、まちがないな。多少君と違う部分はあるがな」

『次に、ならば何故自分で世界に干渉しない。』

「私は剪定者であつて神ではない。世界の枝葉を切る事はできても、直接世界を動かす事はできないのだ。」

『最後だ。ならお前は世界の中に現れる事はないのか？』

「ふむ。…私は干渉する事はできんが、世界に訪れる事はできるのだ。」

そのため世界が動く時、その瞬間に立ち会う事はある。歴史の節目

を見極めるためにな。

まあ誰にも認識されないので居ないも同じだがな」

『…何だよ使えねーな。色々手伝わってもらおーと思ってたのによ。完全人任せじゃねーか』

「む、悪かったな、無力で。」

『…いや、責めるつもりじゃねーんだよ。うん。』

『あ、そーだわりいもう一つ。』

「私は君に飲み物を与えた記憶はないが。」

『…シヤレじゃねーよ。』

そーじゃなくて、お前は世界のどの枝に俺を送るんだ？パラレルワールドが幾つも存在してんだろ？』

「ああ、その事か。問題無い。

確かに幾つもの枝葉が存在するが、何百年に一度、一瞬だが一つに収束するのだ。それがお前の”今”からちよつと二年前というわけだ。

因みに言うとな、病にかかった枝すらもその時収束しようとする。

それでは他の枝にも病がうつってしまう。だからこそ剪定者たる私が存在するのだよ」

『ほー…ありがとーよ。』

んじゃ、行きますか。』

「では君を送る。健闘を祈るよ」

時空の扉が開き、いくつかの光が放たれ、その一つに将吾は放り込まれた。

ここから、物語は始まる。

長いプロローグを経て、新たなプロローグを刻みに。

。

第二の人生の序章『目覚め』（前書き）

こんなんを見て下さってる方はいらっしやるんですかね？

第二の人生の序章『目覚め』

。

光を抜ける。もうすぐ真つ白な視界に少しずつ色が付き始めるはずなのだ。

だが、いつまで経っても将吾の目には呆れる程の白しか映らなかつた。

まさか視力に支障をきたしたのかと内心焦るが、なんのことはない。

ここは病室なのだから。

しばらく安堵とまどろみに浸かっていると、視界にカエルが現れた。どうやら話かけられているらしい。

まさか脳がイカれたかと、まだ視力の低下の方がマシなのではないか。

なんせカエルが話しかけてくるんだもの。

なんて失礼な事を考えていると、カエルは少し困ったようにまた口を開く。

「命を救った医者に対してそれは失礼なんじゃないかな？」

…この世界では両生類が医者をやっているらしい。

あんの嘘つきめ。

このカエルの方がよっぽど世界の異常じゃねえか。

「いい加減にしないと僕だって怒るよ？僕は人間なんだ。」

成る程、俺は思った事を口に出していたらしい。

このカエルが人間だったとしたら、確かに失礼に当たるかもしれないな。

うん、謝ろう。もしこの肌色の両生類が人間だったとしたら。

カエルの眉（？）が吊り上がり、鬼の形相をなす。

そして大きな声で

「ゲコツ!!!」

とは鳴かなかった。

代わりに何かで顔面を叩かれた。

それでやっと緩やかながらも意識がハッキリしていき、上半身を起き上がらせ、俺を殴った物を見やる。

なんとカエルの医者にはたんまり誰かさん（俺か？）の排泄物が入った瓶が握られていた。

それが尿瓶だと理解すると同時に、血液の大運動会が始まり、一気に完全な覚醒へと向かう。

怒り任せて声を荒げようと口を開けた瞬間、違和感を感じた。

何かがおかしい。

果たしてここは本当に俺の住む世界か？

何だ？

さらに俺は誰を思い浮かべてあの野郎って言ったんだ？

それに世界の異常って何だ？

起きたばかりだから頭の回転が良くない。
彼にしては珍しく頭の中でハテナマークを連発していると、
カエルがまた口を開いた。

「どうしたんだい。少し混乱しているのかな？
なら詳しい話はまた後の方がいいかな？」

脳内の花火大会がとりあえず止まる。
どうやらこのカエルは何か知っているらしい。

ここはとりあえず

『いや、今で大丈夫だ。』

カエルよ、その詳しい話とやらを聞かせて
言い切る前に再び尿瓶で殴られた。』

しかも今回は感覚が戻っているからか、相当痛い。

「君はもう少し人に対する敬意を学んだ方がいいね？
何度も言うようだけど僕は人間だよ。」

君がそういう態度なら、詳しい話はまた今度にするよ？」「

なんだこいつは。

皇帝の俺にタメ語な上に尿瓶で殴るだの敬意を払えだの目茶苦茶じ
やねーか。

だがこいつに話を聞かないと先に進めん。
悔しいがここは我慢だな。

『…すいませんでした、先生。あのー、詳しい話とやらを…お聞か
せ下さいませ』

「それでいいね。」

ヘンテコな敬語だけど僕の怒りも晴れたから話の続きをしようか？
…って言いたいところなんだけど、僕より君を発見して此処まで連れて来てくれた人の方が詳しいからね…。

…正直僕が知ってるのは
君が倒れてたって事と、

3日目を覚まさなかつた事、
あとは倒れてたのが不思議なくらい君の体に異常は無いつて事ぐらいなんだよね。」

嘘だろ！？

こいつは状況を理解できてない目覚めたばかりの入院患者に尿瓶を二回も叩きつけといて、それで更に話をエサに敬語使わせといて…
…。『たいした情報じゃねーじゃねーか！！』

詐欺か？詐欺なのか！？

テムエこのカエル！張つ倒

尿瓶に再び運動エネルギーが与えられ、またも言葉を遮られる。

「彼らに合わせないよ？」

なるほど最低野郎だ。

カエル呼ばわりを相当根に持ってるらしい。

小せえヤローだな、オイ。

『すみませんでした。』

それでも将吾は謝るしかなかった。

……ん？そーいやこんな風に素で誰かと話したのっていつ以来だ？

第二の人生の序章『恩人』（前書き）

いつになったらプロローグ的な駄文は終わるのでしょうか……。

第二の人生の序章『恩人』

将吾は一人病室にいた。

一人部屋なので室内は真つ白な静寂に包まれ、
たまに開けっ放しの窓に取り付けられているカーテンが揺れ、風と
共に子供の無邪気な声が入ってくる。

だが彼はそんな声も聞こえない程、頭は思考で一杯だった。

彼にあつた覚えのない断片的な記憶もそうだが、
何よりあの医者が部屋を出る時、最後に言い放った言葉が脳を抜け
出して音として現れる。

『ここは日本で学園都市、第七学区の病院。』

彼は日本の皇帝である。

よって日本の地理や情勢等の情報は適時細かく入ってくる。

しかし。

『俺は学園都市なんて知らねえぞ？』

すると、あれ、もしかして記憶喪失ちゃんなんですかー？
少女の声が聞こえた。

外から聞こえたのかと思つて窓を見るが、流石にあんな鮮明には聞
こえないだろう。

では出入口かと考え、扉を見ると僅かに開けた形跡がある。

『誰だ！出てこい』

周りを見渡すが、誰もいない。
また暗殺か、くそつたれが。
将吾が警戒を高めていると、また声がした。

「ここにいますよー！
気づいて下さいー！！」

…いた。

少女はベッドの右脇に立っていた。しかしこのベッドが高いからか、少女が小さいからか、リクライニングで起こした自分の視界に殆ど入っていなかった。

『あ、そこにいたのか。
でも君、病室を間違っていないかい？』

「人を見かけで判断するのは失礼なんですよー！
私はれっきとした大人で学校の先生なのです！」

大人？先生？このちびっ子が？
本当に言葉が通じてるのか疑問に思う。
この世界では日本語が微妙に違うのか？

「だからー、私は大人ですよー！！
…まあそれはいいですけど、
この世界って何です？」

もしかして東ちゃんとは帰国子女かなんかなんですか？

「あ、ちなみに言葉は通じてますよー

また声に出ていたらしい。

それはともかくとして、また、だ。

一体俺はどうしちゃったんだ？

「?どうしたです？」

…もう思考が漏れるのは気にしないぞ、うん。

『いや、なんでもない』

「ならいいですけど。」

あ、ちなみに私が倒れてる東ちゃんを発見したですよ」

『そうか。ありがとう』

「お礼には及ばないんですよー。人として当然の事をしたままでです。それにお礼を言うなら東ちゃんをここまで運んできてくれた上条ちゃんにいうですよー

私一人では運べなくて、困ってる所で助けてくれたのですから私の分も含めて。」

上条？

『分かった。そーするよ。』

ところで上条つてのは扉の前で芋虫みたいになってる奴で間違いないか？』

少女が彼の視線を追うと、そこにはツンツン頭で不幸だーと呟く少年が。

よく見ると頬に見事な紅葉が映えていた。

「上条ちゃん!？」

「いったいどうしたのです!？」

少年は「うう…」と呻きながらも顔を上げ

「いつもの不幸ですよ…」

悲壮感たつぷりに答えた。

…何から聞いたらいいのだろうか。

その不幸とやらに触れた方がいいのか？

逡巡するが、

『お前が上条か』

触れない事にした。

何となくこの男の不幸に触れてもキリがない気がしたからである。

目覚めてから割と多くの疑問を先送りにしてる気もするが、それらは追い追い解決するだろう。

「ん？そうだけど？」

声をかけるとその男は何事もなかったかのように平然と応える。

『んじやー、俺をここに運んでくれたのはお前か。』

『どうもありがとう』

すると上条はウニのような頭をガシガシと掻き、多少気まずそうに口を動かす。

「…いや、当然の事をしたまでだろ？」

どうやらこの二人はとんだお人好らしい。

最初は俺に恩を与え貸しをつくるつもりではないかと疑いもしたが、
彼らの言葉に違和感は無いらしい。
彼らはただの恩人だった。

人の優しさに触れてこなかった将吾にはそれは眩しく、暖かいもの
だった。

色々解らない事はあつて、聞きたい事も山ほどあつたが、彼はただ
ただ、ありがとうとしか言わなかった。

第二の人生の序章『恩人』（後書き）

お気に入り登録して下さった方、あなたは聖人ですか！？

これからも暇つぶしに見て頂けたら幸いです。

第二の人生の序章『家』（前書き）

完全自己満足の駄文を、少なくとも誰かが見てくれると思うと嬉しくてたまりません！

ただ、残念ながら感謝の気持ちがあるまま文章の上手さには繋がりません。ご了承ください笑”

確実にやる気には繋がりますが。

第二の人生の序章『家』

東京の西部を切り開いて作られた学園都市。

ここは周りから物理的にも権力的にも独立した一つの国みたいなものだそうだ。

学園都市には230万人が住んでいて、学園都市という名前よろしく、その内の八割は学生だという。

また、学園都市最大の特徴として、教育のカリキュラムに超能力開発があるらしい。

何故魔術は習得しようとしなのか謎だが、まあそーいう事なんだろう。

そして今いるここは学園都市第七学区とやららしい。なんでも学園都市はそれぞれに特色のある23区からできていて、それらを全権的に管理しているのが統括理事会らしい。

とまあ、この辺までが俺が知りえた情報な訳で。

ちなみに今は子萌先生の家に居候の身だ。

目覚めてから一日で無事退院することになったのだが、いかんせん此処が何処かも解らない状態で、帰る所はおるか、これからどうするかすら解らない。

もう野宿しかないと覚悟を決めたところで子萌先生に呼ばれ、今に至る。

なんかもう、頭が上がらないな。

「ただいまなのです！」

「東ちゃん、ビッグニュースですよー！」

学校から帰ってきた子萌先生がトタトタ走ってくる
将吾は持っていた掃除機を一旦床に置き、マスクをとりつつ彼女に
向き直る。

『お帰りなさいです！
ビッグニュースって何です？』

彼がこの家に転がり込んだのは二週間前。

そしてこの二週間のうちに、簡単な料理（炒め物）や掃除、洗濯と
敬語を覚えてもらっていた。

ただ彼は知らない。

彼女の言葉を真似したところで、それは奇怪な丁寧語をマスターす
るだけだということに。

後々辱めを受ける事になるのだが、それはもう少し先である。

「聞いて驚けです！

なんと東ちゃんは学校に通える事になりました！」

ババーン！という効果音付きで彼女は右手を突き出す。

その手には活字でタイピングされた文書が握られている。

『…仮親登録書？

これは何です？』

「私が東ちゃんの仮の親になったということですよ！

何やら東ちゃんは記憶が混乱してるみたいだし、帰る所もないじゃ
ないですか。

そこで東ちゃんを調べたら、チャイルドエラーだということなので、
この際私が仮親になってしまおうと思ったのです！」

彼女は右手を突き出した状態のまま、胸を張って言う。

『えっ？』

彼は言葉を発する事ができなかった。

すると子萌はだんだんしおらしくなっていき、
目に涙を浮かべ

「やっぱり迷惑でしたか？」
なんて言ってしまったている。

『！そんな事ねえ！』
やっと言葉が紡がれる。

『…なんていうかさ、嬉しーんだけど、
こんなに人に優しくされた事ないからさ…
ちよつと信じらんなくて

…ありがとう。もうここまでされたらなんてお礼したらいいか分か
んねーよ』

涙が頬を伝う。しかしどちらが流した涙かは知らない。
普通に考えれば子萌の方だろうか。

「お礼はありがとうで十分なのです！

もし、それでもお礼がしたいなら、私の代わりに他の人に優しくしてあげてください。」

『…分かった。そーする。』

。

あれから一時間程話は中断していただろうか。
ようやく将吾が口を開く。

『そーいやさ、なんで仮親登録したら学校に行けるんです?』

「ああ、流石に身元の分からない人を学校には入れられないですからね。」

私が仮親になれば、その問題はクリアなんですよ」

『え、でも。学費とかは?』

「もちろん私が出すのです!お金の事は心配いらなそうですよ」

伊達に一人身ではないのです!…:…うう」

『……。先生は見た目子供だからね』

「東ちゃああん!」

腕を振り回してポカポカと将吾の背中を叩く。

『わ、痛い痛い!』

『ごめんなさいです!』

つついおどけてしまったが、彼の心は大きくて柔らかいものに包まれていた。

アルバイトでもなんでもして、少しずつでもお金を返していこう、と。

この恩は何かあっても忘れずに、少しずつ返していこう、と。固く心に誓うのだった。

「全く、東ちゃんはレディに失礼です！」

…あ、そうそう。と、思い出したように言葉を足す。

「仮親登録するにあたって、苗字を東のままにしときましたけど、問題無いです？」

『はい、大丈夫です。』

…ん？今更だけど何で俺の名前を知ってるんです？
名乗った記憶は無いですよ？』

「あー、背中に東将吾ってやけに達筆で書かれた紙が張られていたですよ。」

それで、東さんって呼びかけたら反応したものですから東将吾だって確信した訳です！」

何だそりゃ？

仮にも皇位についてる人間にそんな小学生みたいな悪戯をする奴なんかいいたか？

そーいやこっちの世界に来る前アイツに背中を叩かれたような…。

あのヤロー。

……またか。

目覚めてしばらく経ったが、疑問は絶えない。

第二の人生の序章『家』（後書き）

一応彼は16歳なので、少し素直な性格にしているつもりなんですが、どーでしょう？

駄目ですか。

すみませんm（　　）m笑”

第二の人生の序章『学校』（前書き）

いつまで序章なんだろう？

第二の人生の序章『学校』

学校とやらに行くのは初めてだった。

俺や他の候補にはものごころ付いた頃から専属の家庭教師がついていたからだ。

そもそも、学校に入るのに試験が必要だったとは……。

子萌が入試要項をたんまり持ってきたのは仮親登録から一週間後。その中からレベル別に3校選んで試験を受けたのだが…。

結論から言うと彼は3校の内、最も偏差値の低い名前も知られていないとある高校しか受からなかった。

何故か。

理由は3つだ。

それはここが科学のみ発展した場所であり、科学崇拜の国から見ても数十年技術が進んでいるため、理系分野が殆ど理解できなかったこと。

次に、世界が違えば歴史も違うので、社会も答えられなかったこと。

最後に、彼が受けたのは途中編入の入試であり、従来より数段難しいかった、ということだ。

子萌は受ける前から入れれば何処でも構わないのです！なんて言っ

ていたので何ともないようだったが、（それで救われたのも確かだが）

皇帝だったハズの彼からしたらかなりの衝撃だった。

俺はこんな馬鹿だったのか……。

何はともあれ、彼は高校に編入する。

既に桜も散って、もうすぐ紫陽花の季節。

周りより遅いスタートだが、これから通う名も知らぬ学校の門に立った時、僅かではない期待感で彼はたじろいでいた。

『うっ、緊張すんなー！』

誰も俺が誰かなんて分かってねーみてーだし、友達とやらをつくるチャンスだからな。

気合い入れていかねーと。

…短い間かもしんねーけど。』

彼の手には葉書が握られている。

それには今日の何時に何処の教室に來い、といった内容が印刷されている。

将吾は葉書を学生ズボンのポケットにしまう。

この高校に決まった時、彼女が用意してくれたものだ。

学生服を直し、一年のある教室に向かう。

。

教室は静寂に包まれている。

一方

彼はひたすら驚いている。

将吾が教室の前で待機していると、何やら聞き覚えのある声で呼ばれた。

その時は緊張で一杯で気づかなかつたのだが、教室に入り二度驚く。一つは、このクラスの担任が彼の仮親、月詠子萌であったこと。

二つ目は、このクラスに彼の恩人の一人である上条当麻がいたことである。

色々気の利いたスピーチを考えていた将吾は、予想外の展開に動きを止めていた。

一方教室の反応はというと様々だ。

子萌はしてやったりといった顔でニコニコしていたし、

上条は、アレ？アイツはあの時の！？と驚いていた。

クラスの女子は予想より編入生の顔が良かったのか心なしかキヤーキヤーしていた。

それを見てクラスの男子は

フラグメイカーは上条だけで十分だ！と何やら受け入れられてない様子。

がらにもなく口を開けていると、聞き慣れた声で話し掛けられた。

「さあ、東ちゃん！

先生の言った通り、ズバツと自己紹介しちゃうのです！」

その声で我にかえり、彼は口を開いた。

実は仮親である彼女にあらかじめスピーチの内容を教えられていた。万が一緊張で自分の考えたスピーチを忘れたときのために、だそう
だ。

彼は子萌に対する感謝の念と共に話した。

後悔する事になるのも知らずに……。

『今日は野郎ども！

ご機嫌よう子猫ちゃんたち！

俺は東将吾というです！

今まで学校に通ったことないんで緊張で一杯ですけど、皆さんと仲良くなりたいので、どうかよろしくですよー！』

子萌を除いて

教室が凍りつく。

そして今に至るのだ。

「えーっと…」

凍てつく空気の中、口を開いたのはオデコが印象的な女の子。上条達に後で聞いたのだが、名前は吹寄というらしい。

「貴様が子萌先生の仮の息子で間違いないか？」

子萌の言う通りやったのに何故こんな空気なのか。呆然としながらも答える。

『ん、そうなんですよー。』

「貴様は軽い記憶喪失だと聞いたんだが…
もしかして子萌先生の口調が正しい敬語だと思ってない？」

『え？違うの？』

彼の言葉に教室はどよめき、呆れた顔で前に立つ彼ら（主に子萌）を見る。

吹寄という女子もその誇張した額に手を当て、溜息を漏らす。

「子萌先生の口調は、ただの奇怪な丁寧語だから。
子萌先生以外がやると気持ち悪いだけだぞ」

教室全体が縦に頷く。

それと同時に将吾の顔から血の気が引く。

そして彼は誓った。

いくら仮親でも、彼女の言う事を全て鵜呑みにするのはやめよう、と。

しばらくしてホームルームが再開され、普通の授業が展開された。彼はというと、その日一日中ショックから立ち直れなかった。

第二の人生の序章『事件』（前書き）

いつもよりもより一層短くなっております

第二の人生の序章『事件』

帰宅前のホームルームが終わり、今は放課後。

将吾は未だ呆然自失としていた。

今日の事は殆ど覚えていない。

覚えていることといったら

何故かクラスの男連中が俺に気安く話し掛けてきた事と

上条とあと二人、青髪ピアスと土御門で三馬鹿デルタフローラスと呼ばれている事くらいだ。

その三馬鹿に誘われて一緒に帰っている訳だが、

「やゝ、残念やったね」

何故か満面の笑みで俺をなぐさめる関西弁のコイツが青髪ピアス。

「上条属性がこれ以上増えたら大変だったにやー」

にやーにやー喋る金髪の大男が土御門

「ホンマやでゝ、危うく殺ってまうところやったわ」

「本当だぜい、上やん共々亡き者にするとこだったにやー」

「なんで私もなんでせう？上条さんは何も悪いことしてないんですよ！？」

「黙れ殺すぞフラグメーカー！！」

「ぐふう!!」

それで今殴られたのが、俺の恩人の一人、上条当麻だ。

「やりやがったなロリコンにシスコン!!」

お前らがモテないのを人のせいにしてうってんなら、まずはその幻想をぶち殺す!!」

聞く所によると、コイツらはいつもくだらない事で殴り合っているらしい。

バキッ!!

ドカツ!!

ゴツ!!

そして三人ともダウンする訳だが、大丈夫だ。

何故なら彼らはギャグキャラという奴らしいから。

「「誰がギャグキャラだ(や)(にゃ)!!」」

…ほら。

『…って何で声に出してねーのに分かるんだよ!』

「そりゃあ、なあ?」

「何ていうか、やね」

「ギャグキャラに不可能はないんだぜい!!」

…認めてんじゃねーか。

ん？

『アレ、子萌先生じゃねー？』

三馬鹿が彼の視線を辿ると、そこには確かに彼らの担任がいた。だが少し様子がおかしい。

男数人と一緒にいたからだ。

その男数人は彼らと同じくらいの年齢だが、明らかに三馬鹿や将吾とは違う雰囲気だった。

何とも言い難い、下品な印象だ。

「何してんやるな？」

「…さあ？」

『ちよつと見てくるか』

彼らが足を進める、その時、

彼女は無理矢理車に収容された。

……。

一瞬の出来事に言葉を失う。

だが、次の瞬間、将吾は車に向かって走り出した。

三馬鹿も少し遅れて足を急がせた。

第二の人生の序章『事件』（後書き）

軽くキャラクター紹介も更新しました

第二の人生の序章『敵』（前書き）

三連休やっほい！

第二の人生の序章『敵』

彼らは別行動をとっていた。

上条は車の通った跡を辿るように走っていき、

土御門と青髪ピアスは警備員アンチスキルに連絡後、それぞれ裏路地に消えていった。

さて、将吾はというと、

近くにいた原付の兄ちゃんから原付を引いてただの兄ちゃんにしていた。

その際兄ちゃんはかなり喚いていたけど、

『問題無い。すぐに返すから』

とだけ言うと、

アクセルをいれて走り出す。

目的の黒いワゴンはまだ遠くまでは行っていない。

将吾は目で車の行方を追いつつ、

『ぜってえ助けるからな。』

無事でいてくれよ』

とだけ呟いた。

どつちやら車は遠回りしつつ、近くの操車場に向かっているらしい。そこで彼は裏路地を使い、操車場に先回りすることにする。

そんなに遠くない事が幸いした。
よそ者の彼は、この付近しか地理が分からないからだ。
ホツとしつつ、入り口に向かう。

。

そこは、あまりにがらんどろとしていた。

まあ、これだけ静かなら車が現れた時にすぐ分かるだろうなんて考え、待つ。

しばらくすると何かが近づいてくる音が聞こえた。

だがそれは彼の待っていたものではなかった。

彼は、コンテナの陰から現れた数十の柄の悪い視線に晒されていた。

「どおもお！ぼくう！迷子かなあ？」

コイツらは共犯者だろうな。

なんとなくだが彼は思い、情報を得る事にした

『…………どこだ？』

「アアア？！聞こえねえよお！！？」

『…子萌先生はどこだ？』

「ぎやははは!!!」

…あの幼児体型かあ？

さあな！

俺達やあ知らないねえ!!!」

『教えるよ。そしたら警備員に連絡するだけにしてやるからよ。』

「何言ってるのお？知らないって言ってるんだろバーカ！

そもそもよお、お前この数相手に命令口調たあとんだキチガイだなあ!!!」

『…………』

「シカトかよ！気にいらねえなあ!!!」

ちよつとばっか世間って奴を教えてやんなきゃあなあ」

『…もういい。』

「ああ!?!」

…わりいな。

穩便にすまそうなんて考えちまった俺が悪かったよ』

「…あんま調子のんねえ方がいいんじゃないねえの？

こん中の殆どがLevel2以上の能力者だぜ？」

『考えたら可笑しいよな。どう見てもお前らに優しくする必要なんてねー。』

「ブチッ」

『ただお前らに切り札は使わないでやるよ。能力の無駄遣いだからな』

「…テメエッ！！やっちまえっ！！」

『殺しはしねー。』

だから、誰か一人ぐらいは起きてるよ？』

言い終わると同時に、

右手にバスケットボール大程の火球が現れる。

そしてソレは、彼が右手を前に翳すと破裂し、的に向かい半径3m程の円柱として伸びる。

半分程の人員はこれにより片付く。

残りの半分は何とか炎を避け、戦々恐々としながらも向かって来る。

しかしそれらも長くは持たなかった。

今度は彼の左手が、開かれた状態で空を切る。

その軌道上に幾つもの氷の槍が現れ、的へ射出される。

氷は残りの的の手足を貫き、僅か10秒足らずの出来事だったが、一人として立っている者はいなかった。

転がっている数十に目を向け、話ができそうな人間を探す。

すると、呻きながらも意識を保った奴を見つけた。
先程彼と会話をした男だ。

彼は男の胸倉を掴み、無理矢理に膝立ちにさせて話しかける。

『おい、お前。』

あの人を何処へやった？』

「ハハ、知らねーって言ってるんだろーが」

『お前、まだ自分が有利な位置にいるとか思ってるの？』

…勘違いすんじゃねーぞテメエ』

刺さっている氷の槍をグリグリと揺らす。

「ヒッ！ギヤアアア！分かった！

言うから！言うから止めてくれ！」

『最初っからそー言やあいーんだよ。

んで、何処だ？』

「…そつちの、突き当たり…右の倉庫の中…」

指が動かないからか、男は視線で方向を示した。

『そつか、ご苦労。

んじゃ俺は行くからよ。

あ、そうそう。

氷が溶ける前に救急車呼んだ方がいいぜ。

出血が大変な事になるからよ。

』

うつすら口を歪ませながら言う将吾に、
その男は自分の行動を情けない程に後悔した。

。

男の言っていた倉庫の前で、将吾は大変な光景を目にしていた。

『…………』

『おいおい、どーいう事だよテムエ』

声を掛けられた陰はビクツと肩を震わせ、こちらに振り向く。

将吾はもはや、正気を保てなくなる。

初めて無償で優しくしてくれた人を傷つけられた怒りは、正気と殺意を入れ換える。

たとえ騙されても、暗殺されかけても相手に殺意を覚えなかった人間が、怒りに震える。

第二の人生の序章『決着』（前書き）

いつもより余計に長くなっております。

なんか勢いで色々書いてたら普段の二倍くらいの量になってしまいました。

二つに切れよって話だけど、まあいいか笑

第二の人生の序章『決着』

業務用倉庫の中、声が響き渡る。

『さつさとその人から離れる上条おおお！！』

上条は慌てて言う。

「ちょ、おい！待て！

俺は何も

『離れるって言ってんだろーがああ！！』

氷の槍がピンポイントに上条の顔面へ飛ぶ

チッ！

上条は短く舌打ちをして右手を顔の前に置く。すると氷の槍がバギンと音を立て消滅した。

将吾は驚くが、もう一度槍を創り、投げることが。

またしても右手に触れた瞬間に音を立てて消えた。

何の能力か知らないが、深くは考えない。

今重要なのは子萌の保護だからだ。

または、彼が冷静を欠いているからだ。

そんな彼の考えを知ってか知らずか、上条は彼女をそっと壁に寄りかけ、離れる。「東、聞いてくれ！

これは誤解なんだ！」

両手を挙げつつ叫ぶ。

だが。

『この状況でよくもそんな口が叩けるな!!
なら答えろ!』

何で奴らのアジトにテメエだけがいるんだ!!

何で子萌先生は傷だらけなんだ!!

何でテメエの拳に血が付いてるんだ!!

テメエが子萌先生を誘拐した張本人だからじゃねーのか!!??

□

上条は答えない。

いや、答えられない。

おそらくこの状況、自分と将吾の立場が逆ならば、きっと自分も将吾を疑っているだろう。

それほどに最悪の状況、最悪のタイミングだった。

。

将吾が原付で車を追いかけていた頃。

上条は早速車を見失っていた。

「くっそ、見失った!

最初から足で追いつけるとは思ってなかったけどよお

…確か奴らはこの直線道路の突き当たりを右に曲がったよな。

とりあえず俺も右に曲がるか!」

そんなこんなで右に突き進むと、件の操車場に着いた。

辺りを見回すと奴らの車もある。

「珍しくツイてるなあ上条さんは！

このまま不幸ライフからおさらばできたらいいなあなんて…
ってそんな事言ってる場合じゃねえ！！

子萌先生を探さねえと！！」

彼は車の方へもう一度目を向ける。

車のすぐ横には大きな業務用の倉庫があり、南北両極に扉がついて
いる。

車は南側に止まっているため、おそらくは南側から奴らは入るのだ
ろう。

対して上条は北側の扉付近にいる。

そこで彼は考えた。

何故子萌先生は誘拐されたのか。

どうやって彼女を奴らの手から救い出すか。

普通に考えれば身代金目的か、個人的な恨み。

だけど此処は学園都市。

もともと親元を離れて、今どうしてるか把握しづらい子供を誘拐す
るより、実家で暮らしている子供を誘拐した方が親の不安を煽れる
はずだ。

子萌先生に限って恨まれるような事はないだろうし……。

学園都市で子供（に見える大人、だけど。）を誘拐するメリットが、

……。

そうか、学園都市の人間だからこそそのメリットか！！

此処に住む学生は例外なく能力開発のカリキュラムを受けてるはずだ！

奴らの狙いはカリキュラムを受けた子供を外の機関に売り飛ばす事か！

そうなら、外に連れていくブローカーがいるはずだ。

そして多分、取引はあの倉庫の中で行われる。

ただブローカーの車らしきものは無い。

まさか徒歩で外へ出る訳じゃないだろうから、まだ来ていないという方が正しいんだろうな。

そこまで考えると上条は動き出す。

車の方ではなく、倉庫の中へ。

車に向かう事も考えたのだが、この、人が来ないような場所で自分達の車に近づく輩がいたら、流石に警戒されるだろう。

そうなつては成功率もぐっと下がる。

上条の考えはこうだ。

まず、倉庫の中に入り、ブローカーが居ない事を確認して、南側の扉の側に隠れる。

次に、誘拐犯が入ってきた瞬間、スキをついて攻撃を加え、子萌先生を取り返す。

最後に、外に残っているであろう運転手に見つからないよう、またブローカーが来ないうちに、静かに北側の扉から逃げだす。

途中までは上手くいっていた。

むしろ上手くいき過ぎていたのかもしれない。

予想通りブローカーはまだ来ていなかったし、運転手も車に残っていた。それどころか、車にもう一人が残ったらしく、子萌先生を引きずってきたのは一人だけだった。

上手くスキをつけて殴り掛かる事が出来、無傷で気絶させる事にも成功する。

だが、幾つか欠陥があった。

それは、自らが無傷なのに対し子萌先生は車で殴られたのか傷だらけだった事。

次に自らの拳に誘拐犯の血が付着していた事。

そして、

彼女は恐怖から我を失っており、上条が保護した後も彼が上条だと認識出来ず、大声を出して暴れてしまった事。

彼は焦った。

彼女の気持ちを考えれば自我を失い暴れてしまうのも容易に予想できたはずだ。

自分の詰め甘さに怒りが沸くが、自責する時間はない。

外にはまだ仲間がいる。

おそらくそう長くない内にブローカーも来る。

彼女が騒いでいては、助かる確率は下がる。

いや、むしろ二人とも助からない可能性の方が高いだろう。

このままではまずい。

このままでは子萌先生を助ける事ができない。

子萌先生を宥めようと尽力するが、余程怖い思いをしたのだから、一向に収まる気配がない。

上条は一言、ごめん。後でいくらでも謝るから。とだけ言うと、子萌をその拳で気絶させた。

その時の彼の表情は誰も知らない。

バンツ！！

北側の扉が開く。

まさかブローカーが来たのかと上条は身を固める。

しかし、聞こえたのは少年の声。

耳にまだ残っている、あの少年の声。

それが誰だか分かると同時、身を震わした。

振り向くと、予想通りあの少年。

最悪。

最悪の状況にして、

最悪のタイミング。

深くそう思った。

。 答えあぐねる上条に、容赦なく氷の槍が飛ぶ。

何とか右手で打ち消しながら、どうするか、どうすべきか考える。

やはり説明するしかないのだろう。

だが、きちんと伝わるのだろうか。

！！！！

気がつくのと彼と将吾の距離は三步程しかなかった。

さらに将吾は大きく左足を踏み出しており、それに続いて沈めた腰の右下からオーバーなアッパーカットのように右手が出てくる。

ただし、握られているのは拳ではなく、炎だ。

まずい！！

炎が弾ける。

上条は慌てて右手を炎に振り下ろす。

轟音と共に炎が射出される。

バギンという音と共に自分へ向かう炎が打ち消される。

上条を避けるように炎が暴れる。

視界が晴れた時、お互い次の動作に入っていた。
将吾は自分の左手を握りしめ、直線的に放つ。

上条は体を右に捻り、裏拳を叩きこむ。

もう言葉のみで解決する事は時間的にも状況的にも無理だと判断したからだ。

とりあえず相手の攻撃を止めてからでない。

両者の拳が交差し、ぶつかる。

放たれた両拳によって、互いに後ずさる。

将吾が次の動作に、

上条が口を開こうとする。

その時、

「やめる!!!」

「上やん、東!!!」

声が聞こえた。

両者の動きが止まる。

声のした方へ、南側の扉へ目を向ける。

そこには三馬鹿の一角とは呼べないほど、知的雰囲気を感じ、精悍な顔をした男が立っていた。

「『…土御門？』」

「何でお前がここに？」

サングラスの奥の瞳を光らせながら、口を開く。

「話は後だ。」

とにかく二人とも、早くここから出るぞ」

……………。

三人は子萌を担ぎ、扉へ向かう。

その時、扉が施錠される。

代わりに北側の扉に人影が現れる。

数は十。

警備員の服装をしていた。

上条は安堵するが、土御門と将吾は彼らの異様な雰囲気違和感を覚える。

警備員は口を開く。

「まったく、使えないな。」

結局は路地裏のゴロツキか。

「

…え？」

「ガキを預かった後、スキルアウトを始末するつもりで、警備員に変装までしたんだけどな。」

まあ警備員になりすましていたおかげで、お前らの通報が耳に入っただから、結果オーライって所か。」

土御門は眉をしかめる。警備員に通報したのは自分だからだ。

「今からお前らを始末して、その辺に転がってる役立たずと共に本当の警備員に引き渡す。」

しばらくしたら俺達が偽物だってこともばれるだろうが、関係ない。その間に俺達は近くのゲートから脱出するからな。」

「いくら衛星から監視していようが警備員に化けていけば問題ない。今から起こる事も、建物の中だから問題ない。」

ブローカーが拳銃を向ける。

二人が固まる。

しかし、将吾は全く動じる事はなかった。

「あんがとーよ。」

テメエらがダラダラ喋ってくれたおかげでやっと冷静になれたわ

……それで。

上条、済まなかった。

どんな非難も受けるつもりだ。

だが今は、コイツらを片付ける!!」

「あっそ。

世間知らずな糞ガキだ」

一斉に弾が放たれる。

だが、それらは彼ら一人にも当たらない。

というより、地面にも壁にも当たらず消える。

凍らせた訳でもなく、
燃烧した訳でもない。

本当に消した。

その場にいる全員が啞然とする中、将吾は考え事をしていた。

『（これでもう、日常には帰れない。

この能力を見てしまったら、二度と普通に接してはくれないだろう。

…恩人を傷つけようとした罰かな。）』

ブローカーの叫び声で現実に戻る。

「何だお前は!!」

『……。テメエら、さっきのゴロツキ共も、俺の事を世間知らずとか言ってるよー。』

…なあ、世間って世界の間って意味か？
だとしたら残念。

俺は世界の誰よりも世間って”奴”を知ってるぜ』

「何言ってるやがる!!!?」

お前ら、休んでないで撃て!!!」

続く発砲音

だが、着弾する音は聞こえない。

しばらくして銃声が止む

銃声の後、顔を青くしているのは少年達ではない。

「糞ッ！この化物め!!!」

『気は済んだか？』

んじゃー、テメエら。

招待すんぜ。

”俺だけの現実へ”!!!

瞬間、将吾とブローカーが消える。

そして数秒後、彼らはまた同じ場所に現れた。

将吾に変わりはない。

だがブローカーは無惨なまでに血だらけで、一人として意識を保っている人間はいない。

あまりの出来事に思考が追いつかず、二人は未だ啞然としていた。

将吾は悲壮漂う表情とともに振り返り、

上条に頭を下げた。

深く、深く。

第二の人生の序章『決着』（後書き）

え、感想や叱咤激励などございましたら、書いて下さると嬉しいです。

どのくらい嬉しいかって、ワンピースが連載再開したぐらい嬉しいです。

ただ、 teme エ文章下手過ぎんだよ！ってのは止めて下さい。
ちゃんと理解してます）（；）

第二の人生の序章『計測』（前書き）

学校が忙しかったせいで中々更新できませんでした（

；）

第二の人生の序章『計測』

子萌が学生と間違えられ誘拐されるといふ、本人には色んな意味でシヨツキングな事件から一週間。

将吾は三馬鹿と共にカエルの病院へ向かっていた。
もちろん、見舞いのために。

「にゃー、あずにゃん、もうそろそろ直した方が良いと思うにゃー」

『誰があずにゃんだテメー!!!』

…そりゃそーなんだけどよー、なかなか直んねーんだよなー』

「まああの口調のおかげで第二の上やんにならずにすんだんやから、ボクあ結果オーライやと思うでー」

「確かにその通りだにゃー」

「あの一、第二の上条さんって一体なんでせう？」

将吾は毎回？だらけの顔で聞き返す鈍感な男の肩を軽く叩く。

『…今は黙つといた方が得だ、当麻』

それよりもう病院着くぞ。吹寄も待つてるだろーから早く行こーぜ』

「うーん、まあ、そうだな」

未だに？を可視できるほど浮かべる上条だったが、諦めたのか将吾

の背中を追いエントランスに吸い込まれていく。

。上条に頭を下げたあの日、将吾は普通の生活というものを諦めた。今まであの能力を見て普通に接してくれた人はいなかったから。この世界でも、化け物として畏怖され、敬遠されるのだろう。

だが、そんな予想は簡単に裏切られた。

「いや、気にすんなって。

皆無事だったんだし、結果オーライだろ？」

それにあの状況じゃ疑われてもしょうがないしさ」「ポリポリと頭を掻きながら困ったように言う上条。

違う。その反応は。

経験してきた反応じゃない。

あの能力を使用した時、俺に二年間の記憶が流れ込んできた。だから知っている。

あの能力がもたらしたらしい現実も、世界の狭間も、あの日の事も。

「？何が違うんだ？」

まさか話噛み合っていない？と首を傾げる上条。どうやらまたしても思考が漏れていたらしい。

『…あのさ、お前は何で普通でいられるんだよ？』

俺は！恩人を疑ったんだぞ！恩人の言葉もろくに聞かずに、殺そうとしたんだ！

その上あんな能力まで持つてる化け物なんだ！

その俺に、なんで普通に接してんだよ……！』

声が倉庫に響き渡り、こだまする。

そのこだまも少しずつ小さくなり、静寂に包まれる。

俺は言い切った後に再び顔を地面に向けていた。

だから上条や土御門の表情は確認できない。

いや、するまでもないのかもしれない。

何秒だったか、何分だったか。

しばらくして頭の上から声が聞こえた。

予想したような声ではなかった。

不審がって顔をあげる。

そこにはさつき以上に困った顔をした上条がいた。

癖なのか、またポリポリと頭を掻きながら、言葉を繋いでいた。

「あー、よく分かんねえけどさ、俺はこれからも普通に接すると思っぞぞ？」

東は友達だからな」

『はっ？』

「だってそうだろ？」

友達同士でも相手を疑う時だってあるし、相手を傷つけちゃう時だってある。それでもゴメンですむなら友達なんだよ。

東は俺を疑って、殺そうとしたのかもしいけど、その後お前は謝ったじゃねえか。

それで済むんだから俺達は友達だ。

そこに疑いの余地はないだろ。それに」

固まったままの表情に向けて、続ける。

「他人のためにここまでやれる人間に、悪い奴はいないだろ。な、土御門」

「当然だぜい。

それより上やんはいつも良いところ持ってくんだにゃー

上条属性も困ったもんだぜい。」

子萌の手当をしていた土御門が顔をニヤつかせながら応える。

上条がそれに何か言い返していたが、正直聞こえない。というより、頭に入ってこない。

将吾の頬に人生何度目かの涙が伝った。

もうどうしていいのかわからなくなった。

ただとりあえず、先ず先に

『ありがとう』

これを言った。

今度は頭を下げずに、笑って。

土御門が呼び出していたエレベーターに将吾と上条が慌てて乗り込む。

子萌の病室は8階だから多少時間がかかるハズだ。

そこで将吾は気になっていた事を聞いてみる。「そーいや土御門、お前なんであの時俺達の居場所が分かったんだ？」

土御門は答えようと口を開いた瞬間、横槍が飛んだ。

「あ！あの時といえはあずにゃん！なんでボクだけ仲間ハズレにしたんや！？

せめて連絡くらいしてもええんやないの！？

夜中まで一人学区を走り回ってたんやで！！？」

『連絡したじゃん、夜中に』

「子萌センセを助けた時に連絡しろや！！だいたい……」

青ピの抗議も虚しく、またしても横槍が入る。

チーン

『やっぱ速いなー、学園都市のエレベーターは』

ここは学園都市である。科学技術は他を圧倒していて、エレベーター一つをとっても、技術の差は歴然だ。

青ピが後ろでなにやら喚いているが、彼らは振り返らず進む。もの凄い速さで。

ここは学園都市である。科学技術は他を圧倒していて、動く歩道一

つとつてもその差は歴然だ。

ただし、彼らが歩いているのは何の変哲もない人口大理石なのだが、すれ違う看護婦達に目移りしながら病室へ向かうと、子萌の病室の前にカエルがいた。どうやらこちらに気づいたようだ。首だけこっちに向き、口を開く。

「やあ、毎日偉いね君達。

先生思いの良い生徒を持って幸せだね？

」

そう言つて顔を正面に向き直す。

扉はあいてるみたいだ。中から声がする。独特な口調の、仮親の声だ。

「全くその通りなのです！

皆さんありがとうございますよ！」

将吾達は疑問を抱く。

何故病室の中から外に、しかも扉の前にいるわけでもなく、確実に視界に入らない場所にいる自分達に話掛けているのか。別にお礼が言われたい訳ではないが、そういうのは面と向かって言うべきではないか。

しかしそこで将吾は気づいた。

カエルが地味に下を向いている事に。

更に視線を下に向けていることに。

そこで彼はカエルの視線を追ってみる、いた。

一週間ベッドに寝ていたせいか、随分と立っている姿が新鮮だった。いや、新鮮というより驚愕だった。こんなに小さかったのか。

「東ちゃんどうしたです？」

『え、いや、何でもないので！』

『そ、それより退院おめでとうですよー！』

とりつくるように話をする将吾。

また、将吾が話し始めた事でやっと気づく三馬鹿。

「ありがとうございます」

やっと教室に戻れるのですよ。

今回のお礼に、戻ったら上条ちゃん達には能力開発のカリキュラムを三日間位みっちりやらせてあげますから、期待しといて下さいねー！」

その言葉に三馬鹿（特に上条）はピシッと固まった。

わなわなと震える口を上条は動かし、抗議する。

「ちよつと待って下さい！」

それはお礼じゃくて罰の間違いではないでせう？

上条さんは進んでそういうのはしたくないのですが、どうせLevel10は変わらないし。」

そつだそつだと抗議する土御門と青皮。

Level1？何だそれ？と先程の上条のように疑問符を浮かべまくる将吾。

「あー、そういえば東ちゃんはシステムスキャン身体計測がまだでしたね
それじゃあ、明日受けると良いです！
特別に申請しとくですから」

もう思考が口に出るのは基本設定みたいだ。
口調とあわせて早く直さなければ。

『システムスキャン？
それは何ですか？』

「はい！上条ちゃん説明するですよー」

ビシツと無茶振り気味に上条を指差し説明を求め。

あまりに突発的な出来事に一瞬たじろぐが、上条は将吾へ説明を始める。

「あー、なんての？システムスキャンっていうやつを受けると、自分の能力のLevelが6段階の内のどれかに分けられるんだよ」
俺はLevel0だからあんま関係ないけど、と付け足す上条。

「ちなみにLevelは0〜5まであって、Level5は学園都市に6人しか居ないので！」

良く出来ました、と上条を労いつつ言葉を足す子萌。

へえ〜、と相槌を打ちつつ考える将吾。

上条がLevel0？

あいつは俺の能力を全て打ち消してたの？

なるほどこつちの世界は能力が高いのかと勝手に納得し、この話を終わらせる。

とにかく今日は久々に子萌先生が帰ってくる。

夕食はすき焼きにして、退院を祝おう。

明日の事は明日考えればいい。

先程の彼の表情に少しの違和感もあったけど、それも明日でいい。

教師と4人の生徒は、談笑しながら病院を後にした。

第二の人生の序章『計測』（後書き）

主人公の名前なんです、深い意味は無いです。

東っていうのは、ただただあずにやんつてあだ名にしたかっただけ。

将吾っていうのも、最初当て字でなんとかの称号つてしたかったのを、

結局良い苗字が見当たらなくて名前だけ残っただけなんです。

まあどうでもいい事ですが。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9207n/>

とある最後の皇帝と自分だけの現実

2010年10月22日18時55分発行